

別記様式（第5条関係）

会 議 録

会議の名称		第3回福津市共働推進会議
開催日時		令和7年6月4日（水）午後2時から午後4時まで
開催場所		福津市役所本館2階 大会議室
委員名		（1）出席委員 嶋田 暁文、依田 浩敏、奥 弘子、小林 真理、富松 享一、中川 孝晃、宮木裕子、山口 寛、山田 雄三
所管課職員職氏名		市民共働部長 香田 知樹 市民共働部地域コミュニティ課長 谷口 篤 地域コミュニティ課市民共働推進係長 井上 真智子 地域コミュニティ課郷づくり支援係長 向井 恭子 地域コミュニティ課郷づくり支援係 折居 鈴香
会議	議 題 （内 容）	・ 令和7年度の審議予定 ・ 郷づくり基本構想及び実行プランの見直しについて（意見聴取） ・ 郷づくり推進条例（仮称）の内容検討
	公開・非公開の別	☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開
	非公開の理由	—
	傍聴者の数	3名
	資料の名称	・ 次第 ・ 資料① 審議スケジュール ・ 資料② 実行プラン進捗状況に関するアンケート結果 ・ 資料③ 令和7年度 実行プラン案 ・ 資料④ 郷づくり基本構想の見直しについて ・ 資料⑤ 郷づくり基本構想 見直し案
会議録の作成方針		☐ 録音テープを使用した全文記録 ☒ 録音テープを使用した要点記録 ☐ 要点記録 記録内容の確認方法 委員による確認
その他の必要事項		

審議内容 （発言者、発言内容、審議経過、結論等）

1. 会長あいさつ

2. 令和7年度の審議予定

事務局

資料1をもとに、今後の審議スケジュールについて説明。

3. 郷づくり基本構想及び実行プランの見直しについて（意見聴取）

ー実行プランの見直しー

事務局

資料2をもとに、協議会に対して行った、実行プランの進捗状況に関するアンケート結果について説明。また、資料3をもとに、令和7年度実行プラン案について説明。

会長

柱1の事務負担軽減のコメントに「他の事務処理についても、さらなる簡素化を望む」とあるが、「他の事務処理」とは何を指しているか。

事務局

コメントをもらった協議会に確認はしていない。ペーパーレス化を図るなど、他にも負担を減らすことはできるのかもしれない。

委員

アンケートの対象者は誰か。また、各コメントはどの郷づくりから出てきたコメントなのか分かれば、課題なども見えてくるのではないか。

事務局

アンケートは、役員に限らず事務局員の方も回答できるようにした。全体としては男性の回答が多かった可能性はあるが、中には事務局員の方がコメントをしてくださった協議会もあった。コメントは、どの協議会から出たかは把握しているが、どなたからかは不明である。

どの協議会からのコメントかが分かるように、修正した資料を後日共有させていただきます。

委員

コメントの中には、協議会以外の方は入っているか。

事務局

入っていない。

委員

将来、協議会に関わる人を増やしたいのであれば、地域の方がこの実行プランを見てどう感じるかということも、どこかで聞いたほうが良い気がする。

また、柱3の「人財確保」という表現が気になる。「確保」を使うと、取り込むという意味合いに聞こえ、入ったら抜け出せないのではないかという印象を与えると思う。「確保」ではなく、「つながりを作る」や「つながりを広げる」など、「郷づくりに行ってみようかな」と思える表現にしたほうが良いのではないか。

事務局

ご指摘のとおりと感じた。

会長

以前から申しているとおり、やることはすでに決まっていて、それを一緒にやってくれる人を確保したいという考えでは、人財は集まらない。地域で何かやりたいと思っている人の想いに寄り添い支援するという姿勢が大切である。

委員

改めて、色々と進んでいると感じている。

柱5の自治会の負担軽減の取組みとして、デジタルツールの活用とあるが、負担軽減と新たに地域活動に参加する人にとっての敷居を下げるという点でも、デジタルツールの導入は必須ではないかと考える。補助事業の講座名は「自治会加入促進講座」としているが、デジタル活用に関する自治会・郷づくり向けの支援も強化したほうが良さそうだ。

会長

先ほど事務局が言われたように、行政側からの調査なども、紙ベースからデジタル活用へ移行していくことが重要であるだろう。

委員

コメントが付くことで、現場でどのような変化が起こっているのか見やすくなった。地域がより良い方向に変化していく可能性を感じている一方で、個々の取組みを頑張りすぎて、全体の目的との関係性を見失ってしまうと、良い方向に進まないのではないかという懸念もある。

柱1～5に示された各取組みは、住民が主体的に地域を運営していくことを目指すための手段であり、本来は各取組みが相互に補完し合いながら機能すべきものである。例えば、柱3は担い手不足という課題を踏まえ、幅広い年代の地域に関わる人を増やしていくための各取組みが挙げられているが、ただ単純に個別の取組みを実施するだけになってしまうと、担い手や地域に関わる人は増えていかないだろう。

したがって、各取組みがどのように関連し、どのような役割を果たすのかを明確に位置付ける、全体の仕組み化やシステム化を構築する必要があるのではないかと。その仕組みが可視化されることで、住民も、各取組みの意義や目的が理解しやすくなり、主体的な参加につながるのではないかと。

会長

確かに、5つの柱を通じて私たちが求めているコミュニティのあり方のようなものはあるが、そこをあまり明確にしまうと、押し付けになってしまう気がする。他方で、ある程度、各取組みと目指すところの関係性が見えていないと、柱の位置付けがよく分からないというのも、ご指摘の通りである気がする。

委員

今のメンバーであれば議論してきたから大丈夫だと思うが、人事異動などでメンバーが変わると、なぜこの取組みをするのかというのが分からなくなってくるのではないかとという危惧がある。

会長

その辺りは、基本構想の中で明示していくということも考えられる。

以前から申しているとおおり、これまでのコミュニティ組織は「**Must**（しなければならない）」が念頭にあり、「必要なことかもしれないが、あまりやりたくはないことをやらされてしまう」というものだった。「そこまで負担ではないから」という理由でお願いし、頼まれた人も「そのくらいなら」という理由で引き受けてしまうが、「そこまで負担じゃないから」という理由でやることは全然楽しくない。また、責任感や人間関係を理由に引き受けると、引き受けない人間に対して恨みが出てきたり、背負わされ感が出てきたりして、結果的に関わりたくなくなるという悪循環を生みだしてしまう。この現状を変えていかなければいけないということが根本にあると思っている。

そのためには、「**Can**（できる）」「**Will**（やりたい）」という個人の想いを大切に、誰かの想いに寄り添って、それを地域が応援して一緒にやっていくようなコミュニティ組織のあり方に変えていくことが重要である。それができると、今までは役員で全部やらなければならず、毎年やることも決まっていた大変だったことが、そうではないあり方で地域を盛り上げることができる。そのためには、ある程度活動が自由にできて、やりたいと思ったことをやれる環境づくり（自由度と若干のお金）が求められる。

このコミュニティ組織のあり方を変えていく仕組みとして、柱1や柱2に自由度を高めていくための取組みがあり、柱3に、人を確保して決められたことをやらせるという発想を変え、地域のやりたいと手を挙げた人を支えてくれるような、人や一緒に楽しんでいけるセンスを持った人を育てるための取組みがあると思う。

また、おやじの会などの自発的な団体ができると、自治会に取り込もうとするとところが従前は多かったわけだが、自治会に取り込まれると、色々な頼まれごとが降ってきてしまい、本来の活動が持続できなくなる。そこで、敢

えて別々の組織として必要に応じて協力し合っていくことで、活動内容は違うが、地域のマンパワー全体でみると活性化しているという事例が登場してきている。このような地域活動の形を実現していくための取組みが柱3であろう。

地域が活動をする中で出てきた色々な困りごとに寄り添ったり、コミュニティ組織同士のつながりを作って相互刺激をしたりといった具合に、地域に対する全体的なコーディネートや伴走支援は、市が行う必要がある。これに取り組んでいくのが柱4であろう。

柱5のうち、自治会加入促進は微妙なところがあり、先ほど申し上げた「Will/Can/Must」の原理から行くと、「自治会に加入すべし」というような条例を制定するのは「Must」の部分を強調することになり、逆効果の可能性はある。むしろ、自治会にみんなが関わりやすくなるよう、自治会のあり方を見直していくことを後押しするような方向性が求められてくると思う。

他方で、福祉や防災など、しなければならないことはあるため、これまでのあり方を全面的に否定するわけではない。「Will/Can/Must」のうち、「Can/Will」を強め、「Must」を弱めていくということが求められてくる。

委員

実行プランを作成している段階ではあまり実感がなかったが、本来であれば、「人財が常に地域で活躍している状況」「誰にとっても利用しやすい拠点とはどうあるべきか」「理想的な拠点のあり方とは何か」といった未来の姿やビジョンを地域全体で共有することができれば、各取組みに頼らなくても、そこに向けての主体的な動きが、地域や行政からも生まれてくるのではないかと思うと、ビジョンのようなものは重要であると考えられる。

会長

恐らく、資料3のP1・2の「5つの柱ごとのプラン」にそのビジョンのようなものが掲げられているのだと思う。基本構想の中に、もう少し明確に入れ込んでいくということで対応していきたい。

委員

事務局と役員は、実行プランを見る目線が異なるため、コメントをする際も、見られ方を気にしてしまっているかもしれない。本音が聞けているのかが気になった。また、「自治」という意味の理解が異なる状態で同じ質問を投げかけているため、もらったコメントのどこを基準に実行プランに反映させるのかも、こちら都合になってしまわないか気になった。前提として、コメントをもらう相手の理解度の一致が必要かと思うが、そのような場は設けたか。

また、会長が言われたことは、おっしゃるとおりだと思うが、協議会からすると、高齢化が進んでいる地域と子どもが増えている地域では、ビジョンへの道筋が全く異なってくるはずなのに、ひとまとめにしてコメントが載っているということにも違和感があった。

会長

目線合わせは、なかなか難しい部分だと思う。取組みを進めていく中で、目線合わせをしていくことになりそうだ。

委員

10月の対話の場は、良い機会ではないかと思う。

事務局

条例の話にも関連するが、やはり前提や認識合わせをすることは大切だと感じる。地域ごとの事情や背景を押さえたうえで、共通認識を持って一緒に進んでいかなければ、後に、「なんのためにやったのか」ということになりかねない。

委員

新しく不満が生まれたり、意図しないところで賛成されたりということが起こりそうだ。

委員

このプランが終了する令和8年度末には、現在の会長の年齢等を考慮すると、役員が交代している可能性もある。実際、各郷づくりを見ていると、会長が交代すると、地域の方針が大きく変わっているケースが見受けられる。地域づくりに対する考え方には多様な意見があるのは当然であり、本来は、その多様な意見を聞き、取り入れながら地域づくりを進めていくべきだと思うが、時間的にも難しいというのが現状である。「自分たちで決めるともめるため、会長が決めてほしい」と言われる方も一部いるため、地域自治とは何かということを、年に1回でも学べるような機会があったら良いのではないかと思う。

会長

会長や行政が決めたことに対して、自分が必ずしも合意しておらずにやる仕事であるため、やらされ感や負担感がある。「あまり負担にならないからやってくれ」という組織では、当事者意識は生まれてこない。それならばやらない方がましだと思う。むしろ、やりたい人たちが、やりたいことをやっていける組織として機能するほうが良い。

委員

これは個人的な思い込みかもしれないが、高齢の男性の方々は、これが当たり前の社会で生きてこられたのか、従来のやり方に対してあまり抵抗がないように感じる。しかし、若い世代は男女問わず、そのような従来のやり方をしている団体には、なかなか近づこうとは思わないと思う。「やっていて楽しい」「いろんな人と交流できて楽しい」と思えることが、参加のきっかけにつながると感じている。

前回の意見交換会で、「楽しいだけではだめだ」と指摘されたことがあ
る。もちろん活動の中には楽しくないこともあると思うが、少なくとも「楽

しいと思って取り組もう」という気持ちを持つことが大切なのではないかと思う。

委員

今年度、4つの郷づくりの総会に参加して様子を見ていたが、運営の仕方が地域ごとに全く異なっていた。

特に、部会への住民の関わり方は、住民が自由に興味のある部会に出入りできる仕組みを取っている地域、自治会を通じて部会員を募り、各部会に振り分けている地域があった。どちらが良い・悪いというわけではなく、この地域の特色は、取り組み方やプランの現実味も異なってくると思うが、その辺りはどのように考えて行けば良いだろうか。

会長

いわゆる「自慢大会」のような発表会を、年に1回はしっかりと開催し、各地域の取り組みの違いや成功事例などを互いに共有することが第一歩であると思う。実際に上手くいっている事例を聞けば「自分たちの地域でもできるかもしれない」と感じられるだろう。こちらから講座を案内するだけでは、なかなか参加に結びつかないことが多いため、事例を通じて共有し合うことが大切だろう。

また、ビジョンは作り直していかなければいけないと思う。現在のビジョンは、現在の住民が主体として関わったものではないため、当事者意識を持ちにくくなっている。10月の対話の場も含め、講座などを通じて発想を変えていくことが重要であると考えている。

副会長

実行プランの取り組みの優先順位が分からない。優先的に取り組むものを色分けするなどして、分かりやすくしてはどうか。

会長

優先順位と取り掛かりやすさがあるため、色分けは難しい気がする。

副会長

そうであるならば、あまり差は付けないほうが良さそうだ。

事務局

大枠で言うと、なるべく早く取り組めそうなものについては各ページの上のほうに持ってきてはいるが、必ずしもそうというわけではない。

ー郷づくり基本構想の見直しー

事務局

資料4をもとに、郷づくり基本構想の見直しについて説明。また、資料5をもとに、郷づくり基本構想の見直しを検討している箇所について説明。

会長

郷づくりの位置づけを私なりに解釈し直すと、「まちづくりの中核には、地域住民が主体となってやっていく部分が必要である」ということだと思う。それはなぜかというと、行政で何かしようとする、「誰が責任を取るのか」「何かあったらどうするのか」といった懸念が先に立つ。ここで言う「何か」とは、重大事故だけでなく、住民からの苦情や不満も含まれる。つまり、住民から苦情や不満を言われたら困るという理由で、本来は必要なことかもしれないが、実行しないというケースが少なくない。今の世の中全体がそうになってしまっている。

ある地域で雪が降った日に PTA の有志が校庭に雪の滑り台を作り、子どもたちと楽しく遊んでいたところ、教頭先生から「事故があったら困るので壊してほしい」と言われ、滑り台を壊したという事例がある。もちろん、事故や責任の所在を明確にすることは重要であるが、「誰が責任を取るのか」という視点に偏ると、活動が窮屈になり、結果として、何もできないという状況を生んでしまう。

そうした状況を変えていくには、「私たちが何をしたいのか」を自分たちで決めていくことが必要である。「お金を払っているのだからやってほしい」「税金を払っているのになぜ対応してくれないのか」という発想になりがちだが、そうではなく、「私たちがやりたいから、自分たちでやる」という主体的な考え方を持たなければ、良い社会にはなっていない。ピアノの音や子どもの声についても、同様のことが言える。知らない人が発する音は騒音と感じられることが多いが、例えば、顔見知りの高齢者が弾くピアノの音であれば、「今日も元気そうでよかった」と思えることもある。つまり、知らないというだけで、距離感や抵抗感が生まれてしまうのである。

このように、地域内で人と人とが知り合い、つながりを深め、共にまちをつくっていくことで、より面白く豊かな社会になると考える。つまり、まちづくりの中核には、そうした関係性の構築が不可欠であり、それを実現していくのは行政ではなく、地域住民自身による「郷づくり」しかないということ伝えていくことが必要だろう。

最近では、地域活動が「**Must**（しなければならない）」という義務感で捉えられてしまい、そうなる就非常な窮屈になり、結果的に「人手不足で困っている」「負担を軽減してほしい」といった声が多く出てきている。それを変えていくには「『**Must**』の原理から『**Will**（やりたい）』『**Can**（できる）』の原理へ」と重心を移す必要がある。「一人ひとりの『したい』『できる』という思いを起点として、私たち自身でまちを作っていく」という哲学を共有して行けたら良いのではないかと思う。

委員

会長が今言われたような内容を、郷づくりの皆さんにお話しするという事は可能か。

会長

可能である。

委員

赤字の部分は、まだ修正は可能か。

事務局

あくまで事務局としての案であるため、可能である。

委員

基本構想は、平成30年ごろの地域課題をもとに作られていると思うが、当時はまだ郷づくり自体が立ち上がったばかりで、郷づくりの認知度を高めたり協力体制を整えたりするといったことが中心であったのではないかと思う。

今後も基本構想が長く続いていくのであれば、将来的にその中心となるのは、私たちよりも若い世代であり、彼らが「郷づくりはこうあってほしい」と思えるような形にする必要があるのではないか。「組織体制の強化」という表現を用いていると、個人的には「組織や体制を強化している団体には関わりたくないな。もっと自由にしてくれるところに行こう。」と思ってしまう。今後の郷づくりの課題に触れるのであれば、この辺りの見直しもしてはどうか。

委員

「まちづくり基本構想」「郷づくり基本構想」「郷づくり計画」などの言葉が並んでいても、内容が良く理解できずにいる。そのため、この会議に参加するにあたり資料を読み込んだが、やはり疑問が多く残ってしまう。

郷づくりとは、地域住民が主体となって進めるものであるため、住民が考えていることを形にしていく必要があると思う。これまでの郷づくりを振り返ると、上から一方的に「今度はこれをやります」と指示を出すような進め方が多く、反省すべき点が多いと感じている。最近では、会長の考え方にも変化があり、私たち自身も「若い世代に理解してもらうためには、私たちの考え方も変えなければならない」と意識するようになった。その結果、郷づくりが徐々に変化してきている。

以前は郷づくりニュースを自治会経由で配布していたが、それでは自治会員にしか届かないため、郷づくりのことを広く知ってもらうためにも、今年度からはシルバー人材センターに依頼し、市の広報と一緒に全戸配布する体制に変更した。

また、小学校の地域コーディネーターと協力し、今後の津屋崎地域や、地域の子どもたちを育てていくためにはどうしたら良いかということをテーマに「語ろう会」を開催した。これは、宮司地区での実施が好評だったことを受けての取組みであり、津屋崎でも開催したところ、若い世代や自治会長が参加してくれた。これにより、若い世代の考え方が分かるようになり、若い世代の方も理解を示してくれた結果、今年度の秋に、一緒にイベントを行う予定である。

自治会長の多くは、自分も郷づくりの仲間だと感じられない方が多かったようで、郷づくりの役員が各自治会長と個別に面談を実施し、郷づくりに対する意見や、市への要望などを丁寧に聞き取る取組みを行った。すると、自

治会長の考えや期待が明確になり、「自分たちが上からの立場でいてはいけない」「自らが変わる必要がある」という気づきにつながった。

その結果、自分たちが何か郷づくりの活動をするときは、「自分たちにとって本当に楽しいと感じるものでなければ、周りの人もついてこない」ということがとても良く分かった。今後何かをするときは、「自分たちがこれをしていて楽しい」という気持ちになって進めていこうという意識改革も行うことができた。

また、この会議に参加して感じたことを地域に持ち帰って共有することで、少しずつではあるが、周囲の意識が変わってきていると実感している。同時に、郷づくりというものが、少しずつ地域に理解されつつあるとも感じている。

会長

大変感激した。今のようなお話を、基本構想の中に反映させていきたい。

現行の基本構想を微修正するというよりも、むしろ古い枠組みを大胆に置き換えていく必要があると感じている。組織体制の改革というよりも、対話を重ねることや、個々が当事者意識を持つようなあり方が見えてくるような形が良いだろう。

権限を持つ人と、出席しているだけの人が分かれてしまう場では、当事者意識は育たず、そこに降ってくる仕事は面倒なものとなり、誰にとっても楽しくない。そうしたやり方ではない郷づくりを目指す必要がある。そのためには、基本構想にビジョンを明確に示したうえで、各郷づくりがどのように具体化していくかは個別に考えていく必要があるだろう。

委員

福津市で最初にコミュニティ・スクールを始めた際、福間中学校の運営協議会に参加していた。当時、家庭と学校以外に地域で子どもたちを支えるというのがコミュニティ・スクールのコンセプトであったが、会議では大人たちが「こうすれば子どものためになるのではないかと議論を重ねていた。そこで、「当事者である中学生がこの場にいないのはおかしいのではないかと」「大人が一方的に良かれと思って行うことは、大人の自己満足になるのではないかと」という指摘をした。中学生は大人に気を遣って「嬉しい」と言うかもしれないが、それが本音とは限らない。だからこそ、中学生が大人の会議の中に入り、彼らが「やりたい」と言ったことに対して、大人がサポートする形が良いのではないかと提案をした。

その中で、ある中学生が「大人はずるい。いつも先回りして答えを言う。」「失敗してもいいから、まず自分たちにやらせてほしい。そして失敗したら大人が手を差し伸べてほしい。」と言った。それをきっかけに、福間中学校では「スタードーム」を作る取組みが始まり、とても良い成果を生んだ。

この経験は、そのまま郷づくりにも通じると委員の話を聞いて感じた。協議会が「こうすれば地域のためになる」と考えて行動しても、地域の人をそれを望んでいるかは分からない。だからこそ、当事者である地域の人を議論の場に呼び、「そもそも何がやりたいですか？」と尋ね、地域の人声を出

せる場があり、「それ、良いですね。やりましょう。私たちが手伝います。」と共に進めていくことができるプラットフォームのような場が、本来の郷づくりの姿であると思う。コミュニティ・スクールで上手くいった方法を郷づくりでもやってみると「自分のやりたいことも、郷づくりに行けば実現する気がする！」という流れができてくるのではないかな。

会長

たとえば、「〇×さんのために」といった具合にお客様扱いすることがベストではなく、重要なのは、その人が当事者意識を持てるようにすること、主体性を育むことだ。

繰り返しになるが、さまざまなプロセスの中には多くの苦労や失敗がある。単にやらされ感でやっていると、そのプロセス全てが苦痛になってしまう。他方で、納得した上で「これをやりたい」と思ってやることは、苦労があっても楽しく感じられる。そうした、主体的な姿勢に変えていくことが今回のポイントである。基本構想も、単なる微修正ではない形の修正ができればと思う。

委員

これまで市に何度も話してきたが、郷づくり制度ができる前のわがまちづくり制度の時は、今のように制度に縛られておらず、多くのボランティア団体が参加して色々な活動を行っていた。しかし、郷づくり制度が導入され、制度として組織化が進む中で、そうしたボランティア団体が徐々に姿を消していった。そうなったのは、郷づくりの制度の組織化が原因の1つであると考えている。

郷づくり体制が整備され、交付金も郷づくりを通して各自治会に配分する仕組みとなった結果、制度の枠組みが整う一方で、かつては市からの交付金を受けて活発に活動していた多くのボランティア団体が消えてしまったというのが、現在の実情である。神興地域では、その傾向が特に目立つ。

基本条例が制約の多いものになってしまうと、取り組む側は大変である。あくまで自由度があり、「あれがしたい」「これがしたい」という思いを、郷づくり側が支援できるような体制こそが、本来のあるべき姿であると思う。私たちが何かを実施するのではなく、多くのボランティアが生まれ、その活動に私たちが、何かしら支援ができるというのが最も良い方法だろうと思う。

委員

「郷づくり」とは、福津市独自の地域のあり方を目指す言葉であり、福津版の地域づくりのことを指していると思うが、資料の定義を見ても、地域づくりと郷づくりの違いがまだつかみきれてなく、アンケートでも「郷づくり自体がよく分からない」という声が多く上がっている。この福津版の郷づくりが目指す姿や哲学の部分が置き去りにされ、「郷づくり」という言葉だけが先行してしまっていることが課題であると感じた。「福津独自の、住民主体のあり方」とは何か、根本部分として最も重要ではないかと考える。

人財育成の部分は特に、現在の郷づくり制度を維持したまま、多様な若い世代が一緒に入ってやっていくというのは、キッカケラボが伴走支援を行ったとしても限界があるように感じている。郷づくりの制度や体制を維持したいと思っているのは誰なのか、改めて考える必要があると思う。

委員が言われたように、郷づくりでしかできないこと、例えば連合体での見守りや清掃などの取組みなどはあると思うが、それらをすべて取っ払ったうえで、郷づくりが「地域のために何かしたい」という地域住民を集めた対話の場を設けて、それを伴走支援してくれる人が一人でもいれば、そこから多世代の人が集まり、様々な新しい動きが生まれてくると思う。

現在は、郷づくりの役員や構成員となり、そのメンバーだけで新しい事業を考えてやっていくという形であるが、その体制では、郷づくりという制度が温存されるがゆえに関われる人が限定され、参加へのハードルも上がるのではないかと。そうではなく、開かれた対話の場から生まれたものを実現していく「本当にやりたい人がやれる」という形が、福津版の郷づくりと言えるのではないかと。郷づくりという制度をどこまで温存するかは、長期的な話になると思うが、根本から見直したり他のやり方と組み合わせたりすることができるのではないかと考える。

会長

防災や福祉の **Must** の部分については、ある程度の組織的なものがあつたほうが良いだろう。それ以外の部分については、前回会議でも言った島根県奥出雲町の三沢地区の事例のように、個人やチームに対して補助金を出すなど、地域を盛り上げていく部会があつても良いだろう。その部会は、組織的に整備された体制ではなく、あくまで伴走役として支援するだけで良い。今後は、組織的に取り組む部分と、柔軟に対応する部分を組み合わせて、実質的に郷づくりの中身を変えていくような取組みが必要である。

そういった意味で、この基本構想の中で、私たちが求める郷づくりのビジョンのようなものを明確に示す必要があるだろう。

ただし、その際、「こうあるべきだ」と固めてしまうのではなく、「こうあるべきでないもの」を示しながら方向性を示すことが重要である。

委員

私の地域はそれほど深く考えていないが、8つの郷づくりを見ると、自治会を中心に考えている郷づくりが非常に多いと感じている。確かに「自治会に入らない人がいる」という課題はあるが、「市民一人ひとりが郷づくりの会員である」と謳っているように、郷づくりは、地域の市民一人ひとりのためにあるものだ。代表者会議などでも度々自治会に関する議論が出てくるが、郷づくりは自治会のためにあるのではないと思っている。

会長

とても重要な論点だと思う。自治会はどういう位置づけであつたか。

事務局

協議会は自治会を基軸としており、基本構想上、その部分を変えていない。

会長

そこは変えたほうが良いだろう。

委員

防災訓練になると、自治会に入っていない人はどうするのかと言う人が必ず出てくる。自治会に入っている人だけの郷づくりではないため、郷づくりと自治会の関係性に対する考え方は、改めたほうが良いと思う。

会長

私も、自治会主体や自治会基軸という考え方は、絶対改めたほうが良いと思う。自治会の延長線上で行動してしまうため、組織の作動メカニズムが、「しなければいけないこと」を押し付けるメカニズムになってしまうのだろう。

委員

すでにそのメカニズムで動いている郷づくりは、なかなか自分たちで変わっていくのは難しいため、そこに伴走支援が必要だと思う。

会長

会長が交代するタイミングは、ある意味チャンスでもある。講座等を引き続き行っていくことが必要だと思うが、その講座に、次の会長候補などが来てもらえると良いだろう。

委員

郷づくりで何か取り組む際に、どこまで自由にして良いかが分かると良いかもしれない。「これはしなければいけない」という部分がどれだけ少ないか、どれだけ自分たちのことを自分たちで縛っているのかということに気づくと、さらに自由な発想ができるかもしれない。

委員

最低限やらなければならない分野はやりつつ、新規事業として対話の場を1個くらい取り入れるなどと組み合わせて行けばいいと思う。モデル地区を作り、それに組み込んだ結果、役員の負担も軽減されて、多様な人がたくさん関わってくれるようになったという結果が出れば、他の地域も模倣するかもしれない。全体を一気に変えようとするより、少しずつ変えていくというのが現実的であろう。

委員

福間郷づくりには広報部会があり、何かしたいという人の受け入れ先になっている。現在は、広報部会にボランティアをしたいという高校生が入っていたり、フードドライブをやりたいという高校生の協力をしたりしている。

他の郷づくりでも、今ある部会の一つが、そのように柔軟に動くということも可能ではないかと思う。

会長

自分の組織を変えてみたいという人に手を挙げてもらい、そこに伴走しながらやっていくというのも一つの手だと思う。例えば、委員がファシリテーターで私が今日話したようなことを話させていただき、実際にやってみて成功体験をしてもらい、その事例を皆で共有するという感じだろう。

4. 郷づくり推進条例(仮称)の内容検討

事務局

第2回で使用した資料をもとに、策定する条例にどんな項目を入れていけば良いかなどを伺いたい。また、10月に実施予定の審議会を、どのような対話の場にするか決めていきたい。

会長

10月の審議会の場については、時期と対話の形式を話し合うということで良いか。

事務局

時期と対話の形式のほか、「どんな郷づくりでありたいか」をみんなで一緒に考えていく場にしたいと思っているため、その内容や対象を誰にするか、進行はどうするかなども決めていきたい。

会長

形式は、2年前のワークショップのような形式で良いだろう。前回とどこをどう変えていくかを考えていけば良いと思う。今回は、条例がテーマになるが、委員はどう思われるか。

委員

参加者全員が「もっとこうしたら良いよね」と前向きに語ってくれるような場になるように考えていく必要があるだろう。

会長

ある程度の素案があったほうが議論しやすいのではないかと思う反面、素案があることで自由な発想が生まれないという懸念もある。

委員

素案があると評論になってしまう可能性が高いため、素案は固めないほうが良いかもしれない。

委員

本来は、そのほうが良いのかもしれないが、今の代表者会議の雰囲気だと「なぜ素案を用意してないのか」という反応になることが想像できる。

委員

「なぜたたき台を用意してないのか」と言うということは、つまり「たたくから覚悟してね」ということだろう。

参加者を誰にするのかというのは、重要になってくるだろう。高齢男性が中心になるというのであれば、男女1名ずつにしたり、40代の方にも来てもらったり、構成までお願いをするというのも手だろう。

自分の郷づくりの中だと言えない話が、他の郷づくりの人も集まっているから言えるようなこともあると思う。そのように、勇気を出して発言できる環境を作ることが重要だと思う。

会長

メンバーは、会長や中心となる人は外せないが、各地域最低2名は出してもらい、少なくとも女性は1名出してもらうのが良いだろう。可能であれば若い方も参加していただきたい。

委員

メンバー集めがしっかりとできれば、前回と同じようなワークショップ形式で良いと思う。

会長

内容は、例えば、前文に何を入れるかなど、どのような理念でやるべきなのかという話にしていくことも考えられる。細かい内容は、事務局と考えていきたいと思う。

進行役は、前回に引き続き委員にお願いして良いか。

委員

承知した。

会長

日程の候補日はあるか。

事務局

10月6日（月）～10月17日（金）の間で考えている。難しければ、11月の前半で実施したい。

委員一同で日程調整

事務局

第一希望日を10月17日（金）、第二希望日を11月7日（金）とさせていただく。

委員

今日聞いたような具体的なエピソードを、郷づくりの代表の方とも共有出来たら良いと感じた。

会長

条例に入れ込んだ方が良くと思う内容は、一度事務局に集めていただき整理してもらった上で、正副会長で検討させていただければと思うが良いか。

委員一同

問題ない。

事務局

意見は、6月中を目途に、事務局に送付していただきたい。

話が戻るが、基本構想の見直しについては、市としては中間見直しという形で、根本は変えずに案を作成しているが、根本や理念的な部分も変えていくということか。「自分たちのやりたい思いを入れたものをやる」「郷づくりの枠にとらわれず、本当に必要で、楽しい、やりたいと思っていることをやる」という内容は、今の基本構想のP18・P19にある将来像や目指す姿という部分にあたるのではないかと思う。しかし、その部分が形骸化されているように感じたため、P18・P19にある内容に、市と地域と一緒に立ち返り、認識合わせをするということでしょうか。

委員

私はP18に、必要なことがほとんど書かれている印象を受ける。会長が「Must じゃない部分が大切だ」と言われていたと思うが、今の将来像には、課題解決に取り組むことがメインに告げられている。そこを「課題解決も」に変えてはどうか。課題解決が中心になると、「やらなければならないこと」がスタートラインになってしまう。9割はこのままで良いと思うが、言葉の微妙なニュアンスを見直してはどうか。

委員

実際は、基本構想にどのように書かれているかよりも、実行して、将来像に掲げられているような形になることが最も良いことである。それは、今後の実行プランや条例の中に入れていくのだろうと思う。

会長

本来の趣旨が理解されていない中で、現状を変えてもらうためには、これまでのものを微修正というイメージで進めてしまうと、「これまで通り」と見えてしまう危険性があると思う。根本を変えることを厭わない見直しが良いと思う。

「全ての人が生きがいを持って、いきいきと活動できる郷づくり」といった表現は、一昔前の「高齢者が元気に暮らす」というイメージである。そうではなく、これからの郷づくりは「楽しい」「わくわくする」といったイメージにしていくべきだと思う。残せる部分は残しつつ、方向性の転換はある

程度見えたほうが良いだろう。特に自治会の位置づけは、変えたほうが良いと思う。

事務局

どこまで反映させるかは検討したい。

会長

審議会場で私たちが「こう変えるべきだ」と決めたことについて、最終決定権は福津市長にあるため、それとは違う方向で行政側の結論が出るというのは仕方がないことだと思うが、異なる結論が出た場合、その理由は明確かつオープンにしてもらいたい。

委員

やり方が分からないから変わらないのではないか。事例を聞けたり、対話の仕方が分かったり、楽しさに気が付いたりできるように、どう手を差し伸べるかが重要だと思う。

会長

まずは、先進地視察、自慢大会、講座の開催や指定したモデル地区の伴走支援などの策を打っていくことをしっかりとやっていきたい。

委員

キッカケラボ主催のウェルビーイング大賞で郷づくりの活動が表彰されたことで、「自分たちの活動が認められた」と、とても前向きになられ、活動者の意識が変わっているのを感じている。郷づくりで活動していても、あまり褒められることはないが、ウェルビーイング大賞のように評価してもらえ、何かがあると良いなと思う。

事務局

以上で、本日の会議は終了とする。